

平成 20 年 5 月 7 日

私立大学図書館協会
国際協力図書館委員会
委員長 丸本 操 様

明治学院大学図書館	秋山美佐子
広島経済大学図書館	宮原 詩麻
上智大学図書館	久保 元子
女子栄養大学図書館	武尾 亮
相模女子大学附属図書館	中戸川陽子
亜細亜大学図書館	藤懸 徳仁

2007 年度海外集合研修報告

平成 20 年 3 月 2 日 (日)～3 月 8 日 (土)まで、2007 年度海外集合研修に参加しましたので、別紙のとおり報告いたします。

私立大学図書館協会海外集合研修報告書

I. 研修概要

(1) 研修テーマ

「アメリカ図書館の現状を知る」

情報リテラシー教育への貢献、学部教育との関り方

図書館教育のカリキュラムへの統合、ラーニング・コモンズとしての図書館

(2) 研修先

● University of Washington

大 学URL <http://www.washington.edu/>

図書館URL <http://www.lib.washington.edu/>

● Seattle public library (Central Library (中央館))

URL <http://www.spl.org/>

中央館URL http://www.spl.org/default.asp?pageID=branch_central&branchID=1

(3) 研修日程

期間:平成 20 年3月2日(日)～平成 20 年3月8日(土)

▽1日目:3月2日(日)成田空港から渡米

▽2日目:3月3日(月)

9:30-10:00 Brief orientation (Ms. Keiko Yokota-Carter)

10:00-10:20 Office of Dean

(Ms. Betsy Wilson <Dean of University Libraries>)

10:30-12:00 Tour of Suzzallo Library and East Asia Library

(Ms. Keiko Yokota-Carter)

12:00-13:00 Lunch time

13:30-15:00 Tour of Odegaard Undergraduate Library and Learning Commons

(Ms. Jill McKinstry <Director of OUGL>)

16:00-18:00 Cocktail at UW club

▽3日目:3月4日(火)

10:00-11:00 Preservation (Mr. Gary Menges <Preservation Administrator>)

11:00-11:45 Gift program

(Ms. Carolyn Aamot <Gift program manager>)

12:00-13:00 Experience in the Allen information desk *group1

(Mr. Adam Hall <Reference and Research Services Operations Manager>)

Lunch time *group2

13:00-14:00 Experience in Suzzallo information desk *group2

(Ms. Saori Tachibana <Japanese collection Assistant>)

Lunch time *group1

14:30-15:00 Tour of Foster Business Library

(Mr. Gordon Aamot <Head of Business Library>)

15:30-16:30 Tour of M.G. Gallagher Law Library
(Mr. Rob Britt <Japanese Legal Materials specialist, manager>)

16:30-17:30 Questionnaire (in Suzzallo Library and OUGL)

▽4日目:3月5日(水)

10:00-10:30 Development and Training
(Ms. Elaine Jennerich <Director of Organization Development and Training>)

11:30-13:15 Hosted lunch (Hub club)
(Ms. Zhijia Shen <Director of East Asia Library>)

13:30-14:30 Media service (OUGL 1F)
(Mr. John Vallier <Head of Distributed Media Services>)

15:00-15:30 Literacy instruction
(Ms. Laura Barrett <Undergraduate Services/Psychology Librarian>)

15:30-16:00 DVD on Equal access campus libraries

▽5日目:3月6日(木)

13:00-15:00 Seattle Public Library
(Mr. Jeff Christensen <Event Coordinator>)

▽6日目:3月7日(金)

シアトルから離米

▽7日目:3月8日(土)

帰国

II. 事前準備

(1) 事前調査

訪問先 Web サイトや関連文献を事前に調査した。メールを利用し、情報共有を図った。

(2) 簡単な意識調査

図書館員向けと利用者向けの簡単なアンケートを作成した。

(3) 見学の予約

シアトル図書館見学に際し、直接予約した。

(4) 事前打合せ

研修日程や質問内容、土産もの分担の確認を行った。

III. 研修報告

3月3日 Brief Orientation

1. 概要

ワシントン大学は1861年に創立し、Seattle、Tacoma、Bothellの3つのキャンパスを持つ。学生数は、学部生約3万人、大学院生約1万人で、留学生が全体の約4分の1を占め、教員・研究者・スタッフ数は、約2万5千人の大規模組織の州立総合大学である。大学の使命として「知識の保存と発展・普及」を掲げている。

ワシントン大学図書館(以下 UW 図書館)は中央図書館(Suzzallo & Allen)、学部生用図書館(Odegaard Undergraduate)の他に諸専門図書館(経済学、法学、東アジア地域など)が18館、Tacoma、Bothellキャンパスにもそれぞれ図書館が存在し、全部で22館ある。ゲートカウント数は中央図書館(Suzzallo & Allen)約10万人/日、学部生用図書館(Odegaard Undergraduate)約1万人

/日である。蔵書数は約700万冊の図書、約6万タイトルの定期刊行物、約3万タイトルのAV資料、マイクロ資料など多数所蔵している。

州立大学のため全ての人に開放しており、入館する際にIDチェックは行わない。BDSのみ設置し、閲覧は閉架資料を含め誰でも自由に利用できる。また、学外者が貸出を希望する場合、年間100ドルを支払えば何冊でも借りることができる。さらに、データベース利用も当日限りのID/パスワードを発行し、サービスを提供している。

図書館スタッフ390人の他に貸出カウンターや配架業務などを担当する学生アシスタント約500人を擁する。スタッフの内訳は、ライブラリアン148人、テクニカルスタッフ208人、管理運営専門職34人である。ライブラリアンになるには図書館学修士号以上の取得が必須である。また、サブジェクト・ライブラリアンは図書館学に加えて専門分野での修士号以上も取得している。テクニカルスタッフの条件は大学卒業以上で、資料の受入等に携わる。テクニカルスタッフとライブラリアンは雇用形態が異なるため、テクニカルスタッフが昇進してライブラリアンになることはない。管理運営専門職とは、図書館運営のための専門職で館長、副館長、会計などである。また、目録以外はアウトソーシングしていない。もし日本のようなアウトソーシングを行うとすれば学生アシスタントの仕事奪うことになる。学生を雇うことは、図書館業務補助という側面だけでなく学生への教育を兼ねているため大学の教育方針が大きく変わらない限り、アウトソーシングは有り得ない。蔵書数ではハーバード大学の5分の1だが、少ないからこそ利用しやすい資料を厳選して提供するようにしている。

2. 目標

“user-centered library”、“any time and any place”。いつでもどこでも利用者が利用しやすい図書館。UW図書館の情報リテラシー教育も大学の理念「生涯教育として自分を再教育できる人間を育てる」に沿ったものである。

3. 特徴

UW図書館が提供するものは、“Service, Scholarship, Respect, Resource, Library as place”。学外からの利用が増え来館利用が減少しているが、学部生を中心に「場所としての図書館」へのニーズは高いため、図書館の場所を活かしたサービスを大事にしている。

4. 図書館総館長の位置づけ

従来は“Director”だったが、現図書館長から“Dean”の位置づけとなった。“Dean”とは大学総長の直下に位置し、学部長(Dean)と同等である。学内での図書館自体の存在感や権限を高めるために位置づけを変えた。図書館長はライブラリアンがなり、ライブラリアンの地位は教員と同等である。

5. ライブラリアンとは

UW図書館の場合、ライブラリアンは図書館学修士号を持っているアカデミックスタッフにあたる。専門職というポジションのため、毎年業務評価を受ける。また、情報リテラシー教育委員会に所属するなど、図書館運営を担う中核的な存在であり、各自の裁量によって判断できる権限を持っている。研究室のような個室を与えられ、レファレンスデスクを担当し、授業を行うこともある。

ライブラリアンの中には、図書館学修士号に加えて専門分野の修士号以上を取得しているサブジェクト・ライブラリンも含まれている。彼らは専門分野のポジションごとに雇用の契約を交わしており、州立大学の図書館であっても専門職扱いのため異動はほとんどない。Web上にサブジェクト・ラ

イブラリアンのリストが専門分野とともに公開されている。

3月3日 Tour of Suzzallo & Allen Library and East Asia Library

ツアー形式で UW の中央図書館である Suzzallo & Allen Library と、東アジアの資料を収集している East Asia Library を見学した。

Suzzallo & Allen Library

1. 概要

Suzzallo Library は Henry Suzzallo 学長の名をとって 1926 年に完成した。図書館は“the soul of the university”として、大聖堂をイメージしたゴシック建築様式の建物を計画した。落ち着いて学習できるよう、光の流れを介したステンドグラス窓の閲覧室(Reading Room)は、重厚な雰囲気醸し出している。Suzzallo Library は人文社会学系のメイン図書館であると同時に州の保存図書館としての役割も担っている。アメリカ政府資料の Depository Library として指定されており、州の刊行物収集を担当している。

北館と南館がある Allen Library は、1990 年にオープンした。歴史の重さを感じる Suzzallo と近代的な建物の Allen は館内で繋がっており、大変広く複雑な造りになっている。Allen 北館が Suzzallo と繋がっており、Allen 北館と南館は2階で繋がっている。南館は自然科学系のメイン図書館である。

2. 施設

州の保存図書館としての役割がある政府刊行物資料コーナーだけでなく、資料形態により図書・雑誌・マイクロフィルム・地図のコーナーが開架部分に配置してある。また、UW 図書館で積極的に収集している児童図書のコレクションも置いてある。資料デジタル化、資料修復などの部署も Suzzallo 内にある。また、Curriculum Materials (授業用図書) 用に一室を設け、教育学部用に教材も置いてある。館内は全てワイヤレスネットワークが整っており、どこからでもノートパソコンでインターネットが使える環境となっている。主な施設は以下の通り。

<サーキュレーションデスク>

学生アルバイトや非常勤スタッフが担当する。資料の貸出を中心に行うデスクである。自動貸返機はない。UW 図書館も加盟している大学コンソーシアムの利用者データも入っているため、別途貸出カードを作成する必要はない。閉架書庫からの取り出し、グループスタディールームの予約管理はこのデスクで行う。

<インフォメーションデスク>

スタッフ(大学卒)以上が担当し、Suzzallo、Allen とともに図書館の出入口に設置されている。利用者から受けるあらゆる質問を的確な場所に振りわけするためのデスクである。資料の配架場所の質問といったクイック・レファレンスや、パソコン関連の質問はインフォメーションデスクで答えるが、レファレンスは質問の専門性に合ったライブラリアンを案内する。また、本の貸出も行う。図書館外の質問も多く、あらゆる質問に答えられるようキャンパス情報をインデックス化し、Web 上で検索可能にしている。スタッフレベル以上なら誰でも座ることができ、普段利用者と接することが少ないシステム・ライブラリアンや学部生用図書館長も、図書館がどんなサービスをしているのか、利用者と直接話すことにより様々な工夫やアイデアを生み出す機会になっているとのこと。本当に座りたい人が1時

間交代のローテーションを組んでいる。

<レファレンスデスク>

Suzzallo の場合、基本的には Suzzallo & Allen Library に所属するライブラリアンがローテーションで座っているが、夜間や休日開館の時は学生スタッフ(修士レベル以上)が座ることもある。Suzzallo & Allen のライブラリアンは、地下に個別の部屋を持っていて普段はそこにいる。質問内容によって適切なサブジェクト・ライブラリアンを紹介する。

<Reading Room>

Suzzallo 側を外から見てスタンドグラスが並んでいる部分の部屋が広い閲覧室(Reading room)になっている。大聖堂をイメージした建物だけに閲覧室の内部も重厚な雰囲気満ちており、私語禁止のスペースになっている。また、1年に1度、図書館への寄付者を招待したパーティーがこの部屋で開催される。この部屋の前には1週間に1回ページをめくる“World's biggest book”が展示され、見学者の目を楽しませるコーナーとなっている。私たちが研修を受けている時も小学生の団体が先生に引率され見学をしていた。

<ILL>

Suzzallo の地下に ILL 担当部署がある。2006 年の統計によると貸借依頼は約7万5千件、貸借受付は約5万7千件である。2002 年の統計と比べると依頼件数はほとんど変化ないが、受付件数は3倍以上増加している。受付件数が増えていることは大変望ましいという評価をしており、学内外問わず資料が利用されることを望んでいる。マイクロ資料も謝絶せず、海外にも貸出を行っているが特に問題は起きていない。学費に ILL の費用が含まれているため、上限はあるものの学生の利用は無料となっている(これまでに上限を超える利用はほとんど無い)。日本への貸出件数は、対海外では5位に入る。

フェア・ユースの考え方により、アメリカでは文献のコピーを取り寄せる場合、現物のコピーを郵送するのではなく、Ariel(FTPやメールを介して他のPCと送受信できるソフト)を利用して提供しているのが一般的である。

<助成金申請のためのサービス>

助成金申請のためのサービス(Grants & Funding Information Service)が図書館内にある。ここでは学生が奨学金や助成金、研究費などを申請する際、その学生のテーマに合った基金の情報を提供したり、申請のためのサポートをする。

<データベース契約を扱う部署>

図書館で導入しているデータベースの契約をひとまとめに担当しているセクションが独立し Allen 内にある。海外のデータベース契約の場合は言語の問題があるため、その国のライブラリアンがサポートすることもあるそうだが、通常は2名で担当している。

<カフェ>

Suzzallo 入口横に「Suzzallo エスプレッソ」カフェを設置し、飲み物と軽食を販売。飲食をしながら勉強をすることができる。授業が始まる前の朝9時頃でも、すでに真剣に勉強している学生たちの姿があった。平日月曜日から木曜日は朝7時半から夜9時まで、金曜日は朝7時半から午後3時ま

で開店している。

なお、完全に密封できるものであれば飲み物の持込は全館で認められている。

East Asia Library

Gowen Hall の3階部分が図書館になっている。韓国、中国、日本など地域別にスタッフが分かれている。中国、日本、韓国、チベットの人文社会学系資料を約 60 万点所蔵。スタッフは 16 名で日本研究は2名で選書、発注から目録作成、ガイドランスなど全てを行っている。書架は、韓国研究、中国研究と共有しているため、スペースに限度があり、閉架書庫への移動作業、除籍作業も行う。なかなか遡及作業まで手が回らず、学内では一番データ化が遅れているとのことで、目録カード架があった。年間約 2,500 冊の単行本を購入している。選書は、日本経済新聞と朝日新聞に毎日目を通し、書評欄は必ず参考に行っている。選書のテーマは「現代日本社会研究」である。アメリカの図書館では一般的に日本語の文学資料は全集のみ所蔵している。しかし、East Asia Library ではワシントン大学の特色を出すために現代小説も含めて単行書も購入している。選書基準のひとつとして、文学賞をとった小説を買うようにし、その小説を書いた作家の他の作品や最新作についても追うようにしている。特に日本のマンガは日本文化を研究する上で必要不可欠な資料であるため、代表的なものや話題になったものを収集している。現代文学も現代社会学の研究に必要である。植民地文学、アメリカの日系人、チベットのコレクションなども最近のトレンドである。占領期文学に関しては、占領/被占領国の言語の問題等もあり、分類上の問題だけではなくどの館が所蔵するのにも関わってくる。ワシントン大学の特色を出したことにより貸出、ILL 件数が増加傾向にある。

3月3日 Tour of Odegard Undergraduate Library (以下 OUGL)

1. 概要

1972 年にできた学部生を対象とした図書館。専門的な資料はそれぞれの専門図書館に揃っているため、この図書館には一般教養レベルの資料が置いてある。1998 年から 24 時間開館を始め、館内での飲食・携帯電話を認めている。飲食・携帯電話を認めているのはキャンパス内でこの図書館のみである。夜間のセキュリティのため、22 時から翌日6時までは学内者限定利用となっている。22 時になると入口は施錠され ID チェックを受け入館する。夜間スタッフが館内を回り利用者一人ひとりの ID チェックを行うことで、安全を確保している。

OUGL では 10 年前にインフォメーション・コモンズをスタートさせ、現在では建物全体がラーニング・コモンズとして機能している。ラーニング・コモンズでは、多くの学生を集客し、学習の場として利用者の要求を一箇所で解決できるよう「one-stop shopping」を提供している。建物は吹き抜けで中2階のある3階建てである。

2. 施設

*1 階(グループ学習のフロア)

出入口正面にインフォメーション&貸出デスクが置かれている。また、友人とグループ学習をするためのスペースが広く設けられており、見学時にも多くの学生が利用していた。従来の図書館の「静かに勉強する場所」とは異なり、学生たちが生き活きと話し合いをしながら勉強をする姿を見ることができた。このフロアは話し声で賑やかであるが、私語ではないためか、あまり気にならない騒がしさであった。学習スペースの側には、短時間で使い終わる人のために立ったまま利用するパソ

コンも並んでいた。

<新着資料コーナー>

入口正面のインフォメーション&貸出デスク前に新着棚を用意し、提供している。1ヶ月単位のサイクルで入れ替えを行う。通常、図書資料のみの紹介になりがちだが、CD など形態を問わず、様々な資料を紹介している。Web 上でも月単位の情報を提供している。視聴覚資料も同じように提供している。

<コモン・ブック(全学共通指定図書)>

学部新入生全員に毎年1冊のコモン・ブック(全学共通指定図書)を入学時に無償で配布している。全学部の学生が共通の図書を読み、レポートを作成したり、学生同士でディスカッションを行うことで、シンプルな取り組みでありながらも大きな教育効果がある。ただし、宗教や国籍などに関係なく全員読むことができる本を1冊選ぶという作業は非常に難しいとのことだった。図書は毎年選定しており、今年は地球温暖化に関する図書(エリザベス・コルバート著「地球温暖化の現場から」)を選定した。選定をしたのは OUGL 館長である Jill McKinstry 氏である。また、このコモン・ブックの広報用ポスターに UW の総長や総図書館長の Wilson 氏、OUGL 館長の McKinstry 氏が今年のコモン・ブックを片手に登場しており、とてもユニークであった。

<コース・リザーブ(授業用資料)>

授業用資料コーナーを入口右側付近に設置。誰でも利用できるように貸出期間は他の資料とは異なり短期間貸出制度をとっている。延滞すると他資料よりも高額な罰金が科せられる。学生にとって、より必要な資料という位置づけのあらわれだと思われる。コース・リザーブの資料は Web 上でコース名、教員名、ジャンルから検索することが出来るようになっている。最近では、図書のような印刷された資料をリザーブして提供するよりも、必要な部分だけをスキャンして電子化し、Web上から提供する“electronic reserve”が年々増加している。

コース・リザーブの資料は、ライブラリアンが教員と連携、協力して資料を選書し提供している。教科書は、図書館の収集方針には入っていないが、図書館で所蔵していない場合は、学部や教員から寄贈される。OUGL ではキャンパス内のどの図書館よりも多数の授業用資料を用意している。また、ESL(第2言語としての英語)資料もここに配架している。

<新聞・雑誌架>

オンラインジャーナルが増えてきており、冊子体として図書館に置いてあるものは減っている。マイクロ資料架も存在するが、近々オンラインに変わるためマイクロ資料は撤去する予定。手にした資料は、書架へ戻さず返本台が用意されている。これは雑誌に限らず図書も同じで、Suzzallo & Allen でも返本台があった。これは利用統計を取り、選書や契約に反映させるためである。学部生たちには冊子体も人気があり、よく利用されている。

<コンピュータ教室>

情報系の授業をするための教室が図書館内にもあり、デスクトップパソコンが約 30 台設置されていた。OUGL で開催している情報リテラシー教育のガイダンスもこの教室で行なう。また、学生たちのグループプロジェクトにも利用されている。1階に2教室用意されている。

* 中2階(メディアセンター)

約3万アイテムの視聴覚資料とそれを観るためにAV機器が設置されたブースが並んでいる。メディアセンターの詳しい概要やサービスの内容については後述する。

* 2階(ラーニング・コモンス)

コンピュータヘルプデスクとレファレンスデスクを同じカウンターに設置。両スタッフを配置し、「one-stop shopping」を提供し、利用者をあちこち振り回さないように配慮が行き届いている。コンピュータヘルプデスクには学生スタッフが常駐しており、コンピュータに関する様々な質問に答えたり、トラブルの対応をしている。この学生達は図書館所属ではなく、他部署のCatalyst(IT部署)で雇われている。レファレンスデスクにはライブラリアンが交代で座り、サービスを提供している。他部署との連携によりライブラリアンが情報機器トラブル対応に悩まされることが減り、スタッフにとっても学生にとっても大変効果的であったとのこと。

ラーニング・コモンスにはデスクトップパソコンが約350台も設置されているが、研修時は満席状態だった。Catalyst(IT部署)は学内全ての情報機器を担当しており、図書館以外のコンピュータ設備も管理している。パソコン設置台数としてはOUGLが一番多い。この階には、コラボレーション・スタジオ、デジタル・オーディオ・ワークステーション、グループスタディルーム(情報機器使用可能)も設置されているが、情報機器等の管理はCatalyst(IT部署)によって行われ、部屋の予約や管理といった運用は図書館が行っている。

<コラボレーション・スタジオ>

2005年に完成した、共同で資料の作成などができる特別なソフト(Teamspot software)が導入されている。大きなデスクトップのスクリーンにノートパソコンを繋ぎ、その画面で数人が一緒に作業できるようになっている。OUGLに2つ、Suzzallo Libraryに1つある。

<デジタル・オーディオ・ワークステーション>

録音編集機能を備えたワークステーションで、予約制で学生、教職員なら誰でも利用できる。

<グループスタディルーム>

全てワイヤレスネットワーク、ホワイトボード付だが、部屋によって使える機器が違うので、用途に合わせた部屋を予約して利用する。この階には4人から8人用の部屋が3つ。全部屋プラズマディスプレイやビデオカメラ等のAV機器を備えており、プレゼンテーションの練習ができる学習スペースである。ビデオカメラでプレゼンをしている様子を撮影し、その映像を画面でチェックしながらプレゼンテーションのスキルを磨いていくという仕組みになっている。大変人気があり、2時間単位の予約制である。1階のインフォメーション&貸出デスク、もしくはオンラインで予約した上で利用する。予約がない時は施錠されている。全館ワイヤレスネットワークになっているため、ノートパソコンを持ち込んでインターネットを使うことも可能である。

* 3階(私語禁止のフロア)

1、2階とは違い、ここは静かに勉強したい利用者のためのフロアで会話は厳禁となっている。図書架、デジタル・プレゼンテーションスタジオ、グループスタディルーム、ビデオ会議スタジオ、ライティング&リサーチセンターが設置されている。

<デジタル・プレゼンテーションスタジオ>

プレゼンテーションの練習を録画することができる部屋である。ノートパソコンを持ち込み 52 インチのプラズマ画面で教室環境をシミュレートすることができる。録画したビデオは、ビデオファイルに保存され、本人のアカウントでアクセス可能となる。

この部屋を利用して作成した図書館紹介ビデオは以下の URL で公開されている。

http://qtmedia.staff.washington.edu/ouglbi/DPS-fig_welcome.mov

<グループスタディルーム>

10 部屋あり、設置されている機能や収容人数は部屋によって違う。ワイヤレス環境とホワイトボードのみの部屋からDVDプレーヤ機能付、パソコン付やマルチメディア機能付まで様々で、2階同様完全予約制である。予約がないときは施錠されている。

<ビデオ会議スタジオ>

アメリカ国内だけでなく、世界中と繋がることのできるテレビ会議室である。3台の 50 インチ画面が用意され、座席(16 人収容)側を映すカメラ、各席の前にはマイク、カメラの角度を自由に操作できるボタンが備えられている。遠隔地との会議はこの部屋を利用することにより、時間、労力、費用軽減という利点がある。

<ライティング&リサーチセンター>

大学院と College of Arts & Sciences との連携により図書館内に設置された。チューターと呼ばれる相談員(大学院生)が直接、学部学生を対象に論文作成に際してどのような調査を行えばよいか、具体的な論文の内容構成の方法などをサポートする場となっている。情報検索はライブラリアン、論文作成指導はチューターへととなっている。レファレンスデスクとの連携も多い。サブジェクト・ライブラリアンとも連携をとることも可能である。希望の日時とチューターを指定し予約をとっても取らなくても利用可能である。サポート時間は 45 分間である。このライティングセンターは全米の大学図書館では一般的である。

3月4日 Preservation(資料の保存・修復)

1. 概要

UW 図書館には、資料保存専門の部署がある。全米の大学のうち Book Repair(資料の修理)部門を持つ大学はあるが、Preservation(保存)専門の部署を持つ大学は数少ない。公共図書館で専門部署を持っているところはほとんど無い。年間予算は、人件費込みで 100 万ドルである。

2. スタッフ

スタッフは、学生アルバイトを含め 15 名である。主に本の修理や製本等をしており、酸性化した写真の修復、濡れた図書などの実際の保存の作業については専門の会社に委託している。スタッフは本のダメージによって保存の方法を考え、何を保存すべきかの判断をしている。

保存に関するスキルは実務を通して身につけるほか、ワークショップに参加して磨いている。UW の図書館学のコースでも保存に関するクラスはあるが、そこでは保存のスキルではなくコンセプトを教えている。

業務の説明をくださった Gary Menges 氏は資料保存に関する授業を受け持っており、学生

には「第一にその資料は保存すべきか捨てるべきかを決断することが大事であり、その上で保存方法、例えば複製を作るのかマイクロ化なのかを考えること」を話している、とのことだった。Menges氏は、大学院の Museology (博物館学) Program の講師をしている。このプログラムは、博物館で働くための2年間の大学院生用プログラムで、世界各国から学生が集まっている。このプログラムの修了者は、終了後9か月以内に4分の3が博物館の職を得ている。

3. 修復

資料修復は、天候などにより影響のする作業である。紙資料の修復とフィルムの修復方法などは大きく異なる。年間の作業量として、2万8千冊の製本、1万冊の修理、200～400冊ファクシミリ版にしている。ファクシミリ版作成は費用がかかるので少ない。利用できないほど痛んだ本は、全く同じように本の形態で複製を作って利用者へ提供することが多い。マイクロ化するよりも本として複製する方が利用されやすい。また、複製を作ることに関する著作権はフェア・ユースのため問題にならない。

4. 保存

今後の資料保存にあたり、電子化よりもいかに現物を保存するかということに力を注いでいる。現在では、電子化すれば大丈夫と思われがちであるが、電子化はソフトウェアやハードウェアに依存しており、今後何年保存できるかわからないため、やはり基本は紙媒体である。たとえば Google Book Search など営利企業にデジタル化を任せた場合、将来も同じ方法で提供が続くかを危惧している、とのことだった。

また、地震・水害・火災等への対処として、災害時計画を立てている。館内備え付けの消火器についての選択にも関わっている。火災に対しては被害を最小限にとどめることを第一とし、スプリンクラー等も整備している。

3月4日 Gift(寄贈)

研修を受けた Gifts Program のセクションは資料の寄贈のみ扱い、寄付金とは別のセクションになっている。

1. 概要

年間5万～10万アイテムの資料を取り扱っている。図書、雑誌だけでなく、DVD、CD、写真なども扱っている。この24年間で約100万冊を取り扱った。大企業がたくさんあるシアトルという土地柄、研究論文なども寄贈される。最近では寄贈でしか手に入ることができない2千年前の仏教資料や写真ファイルなども入手できた。

2. 寄贈の流れ

寄贈の処理は、受取 (receive) → 記録 (document) → 登録 (record) → 資料に寄贈者の名前を表示 → 礼状送付、という流れになっている。

3. 選定方法

まず、集まった資料の情報を一覧にまとめる。最初の決定権は寄贈部門のマネージャーにあり、次にサブジェクト・ライブラリアンと相談の上、受入を決定する。寄贈部門のマネージャーやサブジェクト・ライブラリアンが、UW 図書館に必要ではないと評価した資料は他の図書館 (公共図書館な

ど)や他国の図書館へ寄贈する。寄贈資料のうち、UW 図書館で受け入れるのは全体の 20%である。他国とはモンゴルやネパール、アフリカなどで送料は UW 図書館が負担している。

4. 寄贈理由

アメリカでは寄付控除の制度がある。その制度が影響してか、一般家庭からの寄贈も多いが断らずに全ての資料を受け取っている。中には驚くほど貴重な資料が含まれていることもあるようだ。一般家庭からは引っ越しの際の資料整理により不要になったものがよく寄贈されるが、古いもの、地域の歴史に関する資料などが含まれている。

寄贈資料の内、25%は海外から届く。海外で新しく出版された雑誌等が出版社から送られてくる。UW 図書館は世界でも大規模でレベルの高い図書館なので、UW 図書館に所蔵されることで知名度を上げるという意図があるようだ。また、著者自身が大型図書館に自著を登録してもらいたいという理由での寄付もある。教員からも著作物を出版社が多めに送ってくれるので、それを寄贈してくれる。

5. 寄贈資料の評価

寄贈資料の評価額については、寄贈者自身が決めることになっており、大学側が決めることではない。もし1年の寄贈資料合計額が5千ドル以上と予測しているのであれば、資料がそれぞれいくらであるか、寄贈者自身が情報を入手しておく必要がある。IRS (Inter Revenue Service の略称で、アメリカ政府の税徴収機関)の規則では、現金以外の寄贈の免税は複雑なので、寄贈前に会計・法律の専門家へのアドバイスを受けることを奨励している。

6. 寄贈に関する広報活動

ニュースレター、Web などにより広報している。また、寄贈資料に寄贈者の名前を表示することも行っている。

3月4日 Experience in the information desk

2グループに分かれ、Suzzallo Library と Allen Library のインフォメーションデスクにて利用者との応対を体験学習した。ここでの主な業務は貸出手続きと利用者からの質問の振り分けである。このデスクは図書館の出入口に位置し、利用者の通りも多く常に忙しいが、様々な利用者とは触れ合いながらニーズを把握できるので、利用者からのリアクションを直に受けられるという意味でも重要な場所になっている。Allen Library での研修を担当してくださった Adam Hall 氏も「レファレンスカウンターに来る学生は減っているし、学生からの問い合わせの多いこのカウンターの方が楽しい」と話してくれた。レファレンス件数の減少を間接的に知ることができた。

1. 貸出手续

UW 図書館には自動貸返機は置いていない。返却資料は返却ポストに投函する仕組みになっている。貸出のみカウンターで手続きを受ける。貸出冊数に制限はなく、学部生は4週間、大学院生は3か月、教職員は約1年間借りることができる。雑誌は3日間程度借りることができるが種類によって異なる。Web 上で更新できるため返却期限日の押印は去年から廃止し、その代りに電子メールで返却期限日数日前に知らせるようにした。予約が入った場合、2週間経過後に予約者の権利が発生し、返却依頼のメールが届く。これは教員、学生など身分に関係なく一律である。

2. 質問の振り分け

出入口に位置するインフォメーションデスクで質問を振り分けることで、利用者をたらい回しにしないという配慮がある。このデスクでは図書館に関する質問以外も受け付ける。研修中も図書館だけではなく、キャンパス内施設に関する質問が多かった。同窓会費を払いたいはどこに行けば良いのか、ATM はどこか、コンピュータ関連、配架場所、道順など様々な質問を受ける。図書館以外の学内の様々な情報を案内するため、インデックス化したデータベースが整備されていた。ライブラリアンのブログ(引き継ぎノートのようなもの)もあり、必要な情報の共有は全てパソコンで行われている。

3. その他

Allen information desk ではカタログについての説明を受けた。UW 図書館の Web では3種類のカタログで資料の検索ができるようになっている。

(1) UW 図書館のカタログ

UW 図書館のコレクションだけを検索することができる。

(2) Summit (コンソーシアム)

UW 図書館も加盟している太平洋岸北西部の大学コンソーシアム「Summit」でも、コンソーシアム用の総合目録検索システムを構築している。この Summit は加盟している大学の構成員ならば貸出が可能である。Summit 加盟館の学生データが既に登録されているので、自分の所属する大学の学生証で貸出サービスを受けることができる。貸出期間は学部生と同じ4週間となっている。研修中も他大学の利用者が貸出サービスを受けるケースに何度も遭遇した。また、貸出の際は所蔵館に出向く必要はなく、オンラインでリクエストすれば所属館に資料が送られてくる。Hall 氏いわく、「今時の学生は図書館で資料を探さずに、アマゾンなどオンラインで購入する傾向にある。図書館の利用を促すために Summit は効果的」ということであった。

(3) WorldCat Local

ベータ版の試行をしている。UW 図書館、Summit のみならず世界規模で資料を検索することができ、アメリカ国内の図書館であれば相互利用もできる。検索結果は UW 図書館のものがトップに表示され、次に Summit、そして近隣の図書館の順番に表示される。しかし、検索結果の表示は一般利用者には複雑すぎ、表示やレイアウトなど様々な問題点があるとのことだった。

3月4日 Tour of Foster Business Library

1. 概要

1997年に建てられ、それから約10年間で約300万人の利用があった。図書7万冊、雑誌800タイトル、年次レポート6,400冊の蔵書を持っている。近年、紙媒体の資料から電子媒体の資料へと急速に資料形態が変化しているため、将来的には資料を電子化し、書架スペースを座席スペースに変更したいとのこと。8つのグループスタディールーム、250の閲覧席、40台以上のパソコン、無線LAN完備、レファレンスデスクや貸出返却窓口等、他館と同様の設備を用意している。コンピュータスペースの内6台は、学外者でも利用できるようになっている。「Business Writing Center」も併設され、研究課題やレジюме・エッセイなどの書き方やアイデアや改善点、考えを取りまとめるなど、チューターがサポートしてくれる。利用者のほとんどは学部生である。学部生用図書館(OUGL)が騒がしいため、静かな空間を望む学部生たちがこちらを利用している。キャンパス内に複数の図書館があるので、学生たちは自分の学習スタイルに合わせて図書館を使い分けている。

図書を必要として図書館へやってくる利用者もいるが、Business Library では学外からのアクセスが増加傾向にある。ビジネス研究の分野ではフリーのウェブサイトも充実しており、図書館へわざわざ来る必要があまりないという現状がある。学生が図書館に来なくなることを予測して、美しいデザインの図書館を作ったり、グループスタディールーム等を整備したりするなど、来館者を増やす努力をしている。

2. Web

Business Library の Web はサイト全体が用途ごとに整理されており、数ある UW 図書館の Web の中で最も実用的である。教員、学生、ライブラリアンごとに便利な情報をまとめた「toolkit」というページを用意していたり、ガイダンス担当のライブラリアンが作成した「Research Guide」（いわゆるパスファインダー）があったり、かなり充実した Web となっている。「Research Guide」はテーマや用途によって数百ものページが用意されており、利用者教育に役立っているという話であった。Yahoo! の経済関連ニュースにリンクもあり、経済学のポータルサイトとして紹介している。また、FAQ のページがあるが、これはペンシルバニア大学が開発したものをシェアしている。

データベースは Bloomberg、Factiva、Rorrester Research、Hoover's Online、LexisNexis Academic、Vault Online Career Library がある。何千ものオンライン企業年次レポートや1万以上の雑誌フルテキストデータも見ることができる。

3. ガイダンス

ビジネスコースの必修科目の授業の中で、学生全員に図書館資料について説明をしている。学期ごとに10回、1回が約20分間の説明をする。

トピックごとに調べ方のチュートリアルをまとめたパスファインダーがあり、授業によってポータルサイトの Web ページをカスタマイズしながら利用することができる。全授業用には用意していないが、受講者数が多いクラスから作成しているようだ。現在4人のライブラリアンがいるが、うち1人がもうじき定年退職になることもあって、今後少人数で利用者に対応できるように充実させたいとのことである。

3月4日 Tour of M.G. Gallagher Law Library

アメリカの大学では、法学部の設置基準が他の学部と異なっている。そのため、カタログも独自に構築しており、OPAC も他の図書館とは統合されていない。

1. 概要

M.G. Gallagher Law Library では、法学部の図書館としては米国西北部最大で、州法や合衆国法のみならず、東アジア地域法律関係（日中韓）やニュルンベルク・ナチ党戦犯審判資料を収集していることが特色として挙げられる。また東アジア地域資料はアメリカ北部では最大級の規模を誇り、案内してくれたマネージャーの Rob Britt 氏は日本法律資料専門家でもある。

M.G. Gallagher Law Library は、William H. Gates Hall の一施設である。この建物の名称は地元企業「Microsoft 社」の Bill Gates 氏の父親であり、また UW の法学部を卒業して弁護士となった William H. Gates 氏にちなんで名付けられた。入口には彼の父親の肖像画と建設の際に寄付した方々の名前のメモリアルがある。

2. 環境

吹き抜けのある開放的で美しい館内には、あちらこちらにたくさんのアート作品が展示してある。学外からのデータベース利用が増える中、図書館を魅力的な空間にすることで利用者の気持ちを惹きつけ、足を運ばせようという試みがあるそうだ。

法学部生のために設けられたラウンジは、ID カードで出入りするようになっている。ガラス張りの部屋の中にはゆっくりと勉強できるようにソファや机などが揃えられていた。また、ガイドランス用の教室やグループスタディールームも他の図書館同様に整備されている。

建物入口にはタッチパネル式のスケジュール表があり、ガイドランスの案内などを確認できる。また、レファレンスエリアには、サーキュレーションデスクとレファレンスオフィスがある。レファレンスオフィスは、ガラス張りで囲まれゆっくり相談できる環境である。

契約しているデータベースのうち、もっとも頻繁に利用されるのは Westlaw と LexisNexis で、どちらも学外からのアクセスができるようになっている。

日本の資料は、オンラインではなく、法律判例文献情報とリーガルデータベースの CD-ROM が 2種類ある。予算上、オンラインは無理ということだった。日本の法律関連の資料はここで購入し、East Asia Library とは重複しないように調整している。

Britt 氏は日本の法律の専門家なので、「アメリカで日本の資料を収集するのは大変ではないか？」と尋ねたところ、「今はインターネットで新刊情報も探せるし、国会図書館のサービスや無料の法律データベース(法令データ提供システム、裁判所 Court in Japan)もあるので、それほど苦労はない」とのことであった。

3月5日 Development & Training

図書館内の人事を扱う部署で、職員研修プログラムについて説明を受けた。

1. 概要

ライブラリアンやライブラリースタッフのための研修プログラムを組んだり、職員の相談を聞いてアドバイスや、日常的なサポートをするための図書館内の部署である。人的資源はかけがえのないものであり、非常に大切なものだという考えから 10 年以上前に設置された。こういった研修のためのセクションがアメリカの大学図書館に一般的にあるわけではなく、UW 図書館が特別である。

また雇用の際には、それまでの職務経験やなぜ図書館で働きたいのか、仕事への熱意などを聞いている。

2. 研修内容

新しく雇用された全てのライブラリアン、ライブラリースタッフは、まず初めにオリエンテーションを受けることになっている。また、それぞれの物にメッセージが込められた「ウェルカムグッズ」(鏡→「自分自身を映し出す」、万華鏡→「いつもと違った目で物事をみてる」など)をプレゼントしている。ユーモアを交えたグッズを使い、「困った時には相談できる」といった気楽な雰囲気をつくる効果をねらっている。

また、予算を使って学外から講師を招き、ライブラリアンとライブラリースタッフ対象のワークショップを開催している。テーマは様々だが、例えば「効果的な電子メールの送り方」や「コミュニケーションの表現方法」といったものがあり、より良く仕事ができるようになるプログラムを整えている。こういったワークショップの研修プログラムは、“Staff Web”というスタッフ専用の Web ページに掲載されており、強制されたり命令されたりして参加するものではなく、個人の裁量で参加の是非を決めること

ができる。したがって、テーマによって参加者の人数も変動するそうだ。

さらに、UW図書館に欠かせない学生スタッフへのワークショップも開いている。利用者対応について学ぶため、ある事例に対してどのように対応するか・・・といったことをシミュレーションから学べる内容になっている。例えば、高校生の見学が訪れた時にどのような対応をするかなど、ディスカッションを交えながら学んでいく。学生スタッフは3年ごとに学生と教員に評価されるため、しっかりと利用者対応を学ぶ必要がある。

3. 日常支援

「仕事をする上で一番大切なことはコミュニケーションを密に取ること」という考えから、ライブラリアンやライブラリースタッフが直接会って話ができる環境を提供する支援をしている。オープンハウス日(オフィスを開放する日)を設け、お菓子とコーヒーを片手にリラックスして会話できる場を作り、ライブラリアンやスタッフが繋がれる機会を大切にしている。電子メールや電話ではなく、直接会って相談することでよりよい仕事ができ、またリラックスして会話する中でとても良いアイデアを引き出すことができるそうだ。1日の来室者は80人程度ということであった。

また、ライブラリアン、ライブラリースタッフそれぞれの仕事の成果という面でもコミュニケーションを大切にしている。課された業務や提出された目標を下回っている場合、そのセクションのスタッフと話し合いながら一緒に対策を考えていく形で支援をしている。業務内容などを非難して成果を上げさせるのではなく、あくまで相談の上、どのような環境であればより良い仕事ができるのかを考えていくそうだ。良い仕事をするためには、ライブラリアンのアイデアだけでなく雇用主の力量が必要となる。どんなに良いアイデアをライブラリアンが持っていたとしても、雇用主に力量がなければそのアイデアは活かせない。また、ライブラリアンとしての情熱も非常に重要である。

4. ライブラリアンの目標設定と能力開発

ライブラリアンのランクは①アシスタントライブラリアン②シニア・アシスタントライブラリアン③アソシエイトライブラリアン④ライブラリアンの順で、昇格にはその都度申請が必要となる。アソシエイトライブラリアンまでは期間雇用である。

ライブラリアンにとって、大学や地域に対しての貢献はとても大切なものとなっている。大学図書館委員会等の活動を行い、情報教育のボランティアをするなど、様々な活動をする必要があるそうだ。また、国などが行っているワークショップのグループに参加したり、資金を集めるための研究論文に申し込んだりもしている。

そして、ライブラリアンはファカルティースタッフでもあるため、毎年活動報告書を提出しなければならない。コミュニケーションやリーダーシップなどのスキル、また1年間で何を学んだのか、昨年の目標を実行できたか、実行できなかったものは何かも記入する。それらの活動報告を元に自分の上司と相談して、今後の自己目標を設定することが必要である。仕事の成果が、課された業務や提出された目標を下回っている場合、話し合いによって対策を考えていく。

また、新人のライブラリアンの能力開発を進めるために Librarian Advisory Program というものが作られている。5人のメンバーから構成される委員会で、2年間の任期制である。プログラムに従い、新任のライブラリアン1人につき2人のアドバイザーが割り当てられる。可能であれば1人は新任のライブラリアンが所属する部門から、もう1人は他の部門のライブラリアンから選ぶようにしている。年末には指導内容を再検討し、このプログラム自体も3年おきに見直し、改善を行っているということだ。

3月5日 Media Services

メディアセンターは OUGL 内にあり、AV ブース 40 席と専用カウンターを設置している。メディアサービスはここで一括して行っている。

1. 概要

ジャンルや国籍を問わず約 3 万アイテムの視聴覚資料を所蔵し、館内利用のみならず UW の構成員、Summit (コンソーシアム) の利用者に限り館外貸出も行っている。また、授業に必要な視聴覚資料も提供している。所蔵する映画ソフトはネット上にアップもしており、ログインすれば学外からも視聴ができる。

2. サービス内容

<Netflix サービス>

Netflixとは映像ソフトのレンタル店である。メディアセンターではこのNetflixと提携しており、利用者はメディアセンターを介して DVD を取り寄せることができる。Web 上で予約をするとメディアセンターまで DVD が郵送され、カウンターで借りることができる。教員が授業で利用する場合に限定してサービスを行い、費用負担はない。

<広報活動>

OUGLの広報VTRや新着視聴覚資料のVTRを作製し、YouTubeで公開している。公開中の映像から紹介があったのは、①所蔵しているビデオを編集して紹介したものと、②OUGLの宣伝用。②はSuzzallo のカフェでも流している。映像タイトルは“Odegaard is Not Your Grandpa’s Library”で、「図書館はカッコいいというイメージを広めるために作った」とのことだった。

また、“Library + Radio”から“LibRadio”と名付けたラジオ放送をキャンパス内でしている。この放送では、所蔵している音楽資料やワシントン州の地元の音楽 (Puget Sounds) を集めるプロジェクトで集まった音楽を流している。

3. メディアセンターの使命

AV メディアを提供する上でメディアセンターが常に考慮しなければならないことは、費用・著作権・メディア・IT 技術・ユーザーの5点であるとのことであった。

3月5日 Literacy instruction

OUGL で行っている情報リテラシー教育について説明を受けた。

1. 概要

リテラシー教育は、Seattle、Tacoma、Bothell の 3 キャンパスから 7～8 人のライブラリアンが集まって、ワーキンググループを作って計画している。リテラシー教育には学部によって様々なタイプの活動があるため、このワーキンググループがお互いのやり方を知る良い機会となっている。インストラクションは大きく分けて①Work Shop(図書館主催ガイダンス)、②授業ガイダンス、③Research 101(オンライン・チュートリアル)の3通りがある。この他にも図書館とパートナーシップを組んでいるセクションが、コンピュータワークショップやライティングワークショップを図書館内の施設(席数約30)で開催している。図書館のWeb サイトにも他部署のガイダンス情報がリンクしている。

2. インストラクションの概要

<Work Shop(図書館主催ガイダンス)>

学期毎に7種類のガイダンスを各2回実施している(ワシントン大学は4学期制)。内容は新入生向けの図書館の使い方(基礎編)の他、RefWorks、Google の最適な利用方法、各種データベースの使い方、学术论文の探し方、盗用防止、引用方法など多種多様である。参加者を集めるためにWeb 上、ポスター以外に特別な広報はしていないが、各ガイダンス終了後に次回のお知らせを配ったり、ライブラリアンが所属している学部へ行って案内をしたりしているようだ。また、ガイダンスに参加した人へ図書館で作ったタトゥー(シール)をプレゼントするといったユニークな試みもしている。ネット中心に調査をしている利用者をどのように図書館へ誘導するかは、日本同様にアメリカでも難しい問題のようだ。

<授業ガイダンス>

教員は Web 上からガイダンスを申し込むことができ、テーマや内容は教員の要望に合わせてながらライブラリアンが組み立てている。また、ライブラリアン各自の専門分野の教員と協力して課題を考えることもある。これまでの具体的な例として、レポート等における盗用を防止するような課題を設定し、ガイダンスをしたことがあるようだ。日本同様にアメリカでも盗用が深刻な問題となっていることが伺えた。

<Research 101>

クイズ形式のオンライン自学自習教材で、データベースやインターネットといった情報源について概念的に学べる内容となっている。レファレンスでも学生の知識レベルに応じて紹介したり、ガイダンスの中で使うこともある。学外からも利用できるのも、高校からのアクセスも多いようだ。最近では新入生の半数は高校在学中にデータベースの利用経験があるということで、日米間の進度に大きな差を感じた。

3. 学部との連携

カリキュラムの中に図書館によるリテラシー教育は組み込まれていないが、話を伺った Laura Barrett 氏(心理学ライブラリアン)によると、ライブラリアンとそのライブラリアンが専門とする学部学科の教員が連携して、授業の中でガイダンスをすることもあった。しかし、ワシントン大学は大規模大学のため考え方が分散しており、リテラシー教育を必要だと考えている学部学科もあれば、あまりリテラシー教育について考慮していないところもある。そのことも関係して、ライブラリアンと教員が上手く連携をとれている図書館とそうでない図書館があるようだ。ワシントン大学ではカリキュラムの一部となっていないが、コミュニティカレッジのような小規模の大学ではカリキュラムとしてリテラシー教育を実施しているところがあるようだ。

4. リテラシー教育への評価

現在のところ、参加者によるリテラシー教育への評価は行っていないということであった。自由参加の図書館主催ガイダンスは参加者の人数がかなり少ないため、調査をしなくても参加者の達成度合いを知ることができる。しかし、授業でのガイダンスは人数が多く、さらに参加者のやる気にも個人差があり、それぞれのレベルも異なっている。したがって、授業でのガイダンスが成功したかどうかを知るためには調査が必要ということだった。

5. 指導方法

図書館内で研修制度はないが、お互いのガイダンスを見学することで指導方法を改善し上達させていっている。新しくやってきたライブラリアンも、経験のあるライブラリアンが教えるガイダンスを見学しながら、自分自身で学んでいかなければならないというのが現状である。それぞれのライブラリアンによって教え方が違うので、全てのライブラリアンのガイダンスを見るのが一番良い方法である。また、これまでの指導方法が蓄積されているので、上手くいかない場合には過去の事例から自分に適したやり方を選択することもできる。しかし、こういった自学は個人の裁量でやるもので、必要性を感じない人は他のライブラリアンのガイダンスを見学することはしない。個人によって姿勢が違うことが問題点であると感じた。Barrett 氏も「指導方法について正式に学ぶ研修制度が必要」と言われていた。

6. レファレンスデスクへの質問の変化

インターネットの普及によってレファレンスデスクでの質問の件数は減っているが、質問の質が高度で時間のかかるものに変化してきている。レファレンスデスクに投げかけられる質問は1件ごとの難易度が上がっており、回答までの所要時間も長くなっている。以前(質問→回答というプロセス)と比べて相談の要素が強くなっているようだ。こういった変化に対応し、ビジネスライブラリーでは学生たちがグループで取り組んでいるプロジェクトリサーチの相談に乗るサービスを展開している。それに反し、簡単な質問はチャットや電子メールでのサービスを利用するケースが増えており、利用者はそれぞれのレファレンスサービスを上手く使い分けていると感じた。

学生にレファレンスサービスの利用を促す仕組みとして、“My UW”(UW 所属者用のアカウント)が挙げられる。アカウントにログインすると個人の授業スケジュールが表示され、そこには図書館のWeb サイトとのリンクが貼ってある。リンク先にはサブジェクト・ライブラリアンの名前や連絡先(メールアドレス)が表示されるようになっており、学生がレファレンスサービスを利用しやすい環境を整えている。

[UW 図書館の感想]

まず、学生にとっての図書館が「本が好きな人のための場所」「勉強する人のための場所」などではなく、大学で勉強する上で欠かすことのできない施設になっているのが印象的だった。それも、単に図書館資料を授業の一環に組み込むにとどまらず、得た知識を編集・加工して成果を形にするまでの援助の役割も担っている点は大きな驚きだった。特に OUGL では、「ラーニング・コモンズ」や「ライティング&リサーチセンター」での取り組みが目立ったが、どちらも図書館本来の役割が基礎にあったからこそ、現在も他の部門としてではなく図書館の一部として有効に機能しているのではないかと感じた。結果的に、図書館が他とは違うこととは何かを改めて見せられたように思う。同時に、今までの図書館は何かを調べるための場所であったが、学生支援という観点も含め、今後は様々な利用目的や様々な用途に対応できるような「場所」にならなければならないと感じた。「ラーニング・コモンズ」はしばしば話題に挙がっているが、「ライティング&リサーチセンター」も日本の図書館に導入したい取り組みの一つである。

しかし、UW 図書館の「ラーニング・コモンズ」や「ライティング&リサーチセンター」は図書館が単独でやっている取り組みではない。OUGL にあるコンピュータ・コモンズやグループ学習室内に設置してある情報機器等、図書館と IT 部門がより良い利用環境に向けて連携し、共に協力する姿が印象深く残っている。日本でも図書館が持つパソコンは今後増加するであろうし、IT 部門との連携の重要性を再認識させられた。また、教育的かつ有意義な学生アシスタントの雇用も参考にしたい

アイデアである。カウンター業務や配架業務に学生アシスタントを雇ったり、「ライティング&リサーチセンター」で論文などの作成指導をするチューターを大学院生が担ったりと、仕事を業者にアウトソースするのではなく、キャンパス内にいる学生を活かしている点がとても参考になった。

UW 図書館は、目標である「利用者中心の図書館」を実現するため、利用者のニーズにその場で対応することを優先している。特に「インフォメーションデスク」「ラーニング・commons」「Course Reserves」「Web サイト」からその一端を垣間見ることができた。Web サイトには「ask us」というレファレンスへ繋がる窓口がどのページにも置かれ、すぐに質問できるような仕組みが整えてあり、利用者の動向を把握していることを感じた。さらに、Web サイトのような技術的な面だけではなく、レファレンスライブラリアンのブースを閲覧席に近接させ、ガラス張りにして声をかけやすい雰囲気を作ったり、投書を利用者から直接受け取るようにしたり、また館長がしばしば館内を回って学生に声をかけたりといった小さな心配りからも、利用者中心の姿勢を垣間見ることができた。

こういった心意気が利用者にも伝わっているのか、SuzzalloとOUGLで複数の学生に「図書館やライブラリアンのサービスに満足しているか？」とインタビューしたところ、図書館とライブラリアン両方に満足しており、またライブラリアンの支援についてはとても良いサービスを提供してもらっていると回答した人が多かった。(不満として「家から遠い」や「いつも座席がいっぱいである」といったことが挙がっていた。)また驚いたことに、利用者が自分の使った場所を自分で清掃するよう、OUGLの館内には掃除グッズが用意されており、館長自ら掃除して学生に手本を示している。学習支援への取り組みや利用者の気持ちを意識した心配りだけでなく、倫理的な教育まで考慮している姿勢がとても新鮮であった。

さらに、UW 図書館内の体制についてだが、目標を実現するための組織の基盤がしっかり確立しており、その上で全ての業務が回っていると感じた。特筆すべきことは、図書館で働く一人ひとりの当事者意識の強さである。利用者をどのように支えればよいかを個人個人が常に念頭に置いて業務を遂行し、またスタッフ間で情報を共有する体勢もできているので、組織としても当事者としても目標達成への姿勢がはっきりしているところが見て取れた。また、仕事を機械的な「作業」とせず、スタッフ同士および利用者とのコミュニケーションを大事にすることで、きめ細かい仕事へと繋げていた。利用者中心の図書館にするために評価をし、業務の改善を常に行い、図書館にゴールはないという姿勢に感銘をおぼえた。

3月6日 シアトル公共図書館

1. 概要

シアトル公共図書館は今回訪問した中央館と26の分館からなる。現在の中央館は2004年5月に新築された。新築の費用は約160万ドル。140万冊以上の収容を想定している(旧館は90万冊までの収容を想定)。中央館のスタッフは約300人(司書、用務員なども含む)。市民の67%が図書館の利用登録をしており、現在の来館者数は1日約5,000人である。開館当初は1日約8,000人の来館者があり、開館初日には3万人もの人々が訪れた。

完成当時はALA(アメリカ図書館協会)の10大ニュースの1位に選ばれており、図書館と建築アートが融合した“魅せる図書館”である。Rem Koolhaas氏率いるOMA(Office for Metropolitan Architecture)が設計し、館内のあちらこちらにユニークで斬新な試みが散りばめられている。また、パソコンの使用を前提として建てられており、館内には400台のパソコンがあるほか、無線LANにも対応している。

さらに、環境問題に配慮し設計された“グリーン・ビルディング”でもあり、館内で使用される電力・

水等の資源を節約し、効率的に再利用できる。例えば、雨水は館内の植物への水遣りに利用している。また、図書館の外面を覆う窓も熱効率を考慮して使われている。これらは、障害者への配慮も含め、シアトル市の定めた建築基準に基づいたものである。

分館も含め、資料の管理に RFID システムを導入しており、自動貸出機もそれに対応している。また、資料の返却は、入口横のブックポストとカウンターで受け付けている。返却された資料はベルトコンベアで2階の自動仕分システムに送られ、分類番号単位で用意されたブックトラックに振り分けられる。最終的に書架に並べるには人の手が必要であるものの、かなりの時間と労力が軽減されている。なお、RFID システムは、Tech Logic 社の製品を導入している。

2. 施設

シアトルは坂の街である。この特徴を利用した構造で1階と3階に出入口が作られている。11 階建ての建物は、フロアごとの目的に合わせ、それぞれ異なるデザインにすることで特徴づけをしている。例えば、リビングのようにくつろげるスペースを意識してデザインしたフロアや、壁も床も天井も真っ赤な色で統一し、ミーティングルームやコンピュータールームを設けたフロアなどがある。

6～9階は“ブック・スパイラル”と名付けられており、全蔵書の 75%を占めるノンフィクション資料が収められた書架が並んでいる。この部分は4階層に区切られているのではなく、書架全体が1本のスロープで繋がっている(各所に階段が設置されており、それを使っての移動も可能)。車椅子の使用者でも、少ない負担で書架を回れるよう配慮されている。床にはめ込まれたゴム製のパネルにはデュイ分類法による分類番号が印字されており、取り外しが可能である。つまり、書架移動の際は図書を移動するのではなく、パネルを動かすという新しい発想である。

フロアを繋ぐエスカレーターは目立つ黄色で、遠くからでもどこにエスカレーターがあるのかすぐにわかるようになっている。また、ブック・スパイラルの部分は、スパイラルの坂を下りてくることを意図し、昇りのエスカレーターだけで下りは作られていない。

館内には企業名や人名が名称として使われている施設やコーナーがいくつもある。例えば、講演会等を開くホール(275 席+100 席(予備座席))には“Microsoft”、ヤングアダルトコーナーには“Starbucks”の名前がつけられている。いずれもシアトル市を拠点とする世界的な大企業だが、シアトル公共図書館への寄付に対して感謝の気持ちを表している。こういった施設のほかに、有料で利用できる会議室やカフェ、図書館グッズの売店も設置されている。また、館内には「パブリックアート」として様々な現代アート作品が設置されており、違った観点からも楽しむことができる。市民からの寄付によって設置されたため、「パブリックアート」と名づけられている。

3. 提供資料

図書はもちろんのこと、それ以外にもデータベースを数多く提供している。図書館として契約しているものの多くは、図書館の利用登録をしておけば、館外からもアクセスできるようになっている。また、データベースは 15 分間のみ接続できるようにするなど、長時間の使用を避けるための仕組みを設けている。

さらに、OCLC NetLibrary のオーディオ・ブックをはじめ、電子ブック・音楽・ビデオなども提供している。Web 上からダウンロードできるため、館外からでも 24 時間の貸出サービスを受けられる。また、シアトルは海外からの移住者が多く、英語を母国語としない住民も多い。そのため、英語以外の各国語の資料も、数は多くはないが収集されており、専用のカウンターも設置されている。

4. パンフレット

配布パンフレットの種類が非常に多い。施設案内や利用案内はもちろんのこと、資料紹介のパンフレットも、例えばヤングアダルト向けのフィクションの紹介だけでも対象年齢やジャンル別に何種類も作成されていた。特徴的なパンフレットとして、家系の調べ方をまとめたパスファインダーがあった。調査の進め方の説明にはじまり、所蔵資料・データベースの紹介、類縁機関紹介までがまとまっていた。家系調査を趣味にしている人が少なからず存在するらしく、その要望を受けて作られたパンフレットのようなものである。他にも、コンピュータ操作や図書館の個人情報保護方針なども用意されていた。

5. 市民向けのイベント活動

図書や雑誌といった資料だけでなく、図書館を「コミュニケーションするスペース」として捉え、クリスマス会の開催や、著名人による講演の企画、読書クラブの主宰など、市民向けのイベント活動に力を入れている。また、英語圏外からの移住者には無料で英会話講座を開催しており、地域住民のニーズに応じたサービスを提供している。見学時には、税金に関する相談コーナーが設けられていた。順番を待つ人たちに用意された座席は埋まっており、要望の強さが伺えた。また、ワシントン大学とも連携し、「Medical Lecture Series」という薬学系の講座を一般向けに開催している。

6. 利用規則

貸出資料の延滞には、罰金が課される(上限あり)。また、明らかに眠るためだけに来た利用者や、大きな鞆を持ち込む利用者には注意をする。盗難やホームレスの宿泊先になってしまうこともあり、セキュリティ会社3～5社と連携し、常時警備員が巡回している。違反があった利用者には、最大で3ヶ月間の利用停止措置を設けている。

[感想]

アート、エコロジー、様々な市民向けイベントを融合し、図書館という空間を最大限に利用したサービスを市民に提供している、活気に溢れた図書館らしからぬ図書館である。入り組んだ構造や奇抜な(全てが真っ赤な)フロアなどもあり、使いやすさの面では不十分なところもあるが、廃材を利用したり竹などすぐに生長する植物を床材に使用するなど環境に配慮しており、デザイン性と機能性を兼ね備えている点に感嘆した。

総ての書架がひと連なりになったブック・スパイラルは、車椅子の利用者に便利なのはもちろんだが、全部の資料が繋がりにあることを表現しているようにも感じられ、興味深い。また、図書館出入口が1階と3階に設けられているほど中央館周辺は急な坂が多く、ブック・スパイラルもゆるやかな傾斜になっているため図書館の外にも中にも坂道があるという、不思議な感覚があった。

UW 図書館とシアトル公共図書館は館種が異なっている。そのため、利用者層も利用のされ方にも違いはあるが、従来の「図書館資料を使う場所」から、「図書館という場所の快適さ / 多目的性」を感じさせる点で共通していると感じた。

IV. 研修を終えて

今回は移動日数も含め1週間という非常に短い期間であったが、非常に多くのことを学ぶことができ、とても有意義な研修であった。アメリカの大学は日本の大学より様々な面で進んでいることから、図書館だけに留まらず、広い意味で学生サービスの実例を目にすることができた。

多くのものを見聞きしたが、やはり図書館という場所を単に個人で学習する場から、グループで研究する場、ディスカッションする場、論文執筆について相談できる場へと変容させた UW の事例はすばらしいものであった。また、UW 図書館もシアトル公共図書館も、多様な利用者のニーズを調査し、その結果を基にしてサービスを展開しており、どちらの図書館も利用者サービスを実現するためにはどうしたらよいか、判断基準が定まっている印象を受けた。

研修の最後には「図書館は大学の心臓である」ことの真の意味を理解したように思う。図書館の発展の鍵を握っているのは、「図書館で働くスタッフ」、「図書館 Web」、「場所としての図書館」である。この3つの連動が上手くいって初めて「利用者中心の図書館」になると感じた。ぜひ「利用者中心の図書館」へと脱皮をはかっていきたいが、その前に現時点の在り方を振り返り、基礎固めをしつかりした上で、他部署との連携をとるために準備をすることが急務である。

いつでもどこでも図書館が利用者を支援するための努力は並大抵ではない。サービスの在り方、雇用のシステム、経営の手腕など、UW 図書館ではアメリカの大学図書館の優れた点をいくつも見ることができた。しかし、ラーニング・コモンズ然りであるが、優れた部分だけをそのままの形で自館へ導入したところで、UW 図書館を初めとするアメリカの大学図書館と同じような結果を手に入れることは恐らくできないはずである。アメリカの図書館にはアメリカの図書館なりの発展の歴史があり、社会背景があり、その上で培われてきた図書館の在り方がある。アメリカの図書館での取り組みを参考に日本社会に適した形を見出し、さらに各大学に適したサービスや運営体制を検討していくことがこれからの課題であると考えている。

以上